
愚か者

やぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚か者

【著者名】

ZZマーク

N1393P

【作者略名】

やせ

【あらすじ】

愚か者。とは簡単には言えない気がする。誰しもが愚か者

諦めは優しい。傷口を直視せずにすむ。鈍い痛みだけが広がるだけ。見ないふりをしていれば、後でかさぶたを見ればいいだけの話。ああ僕はこんな傷を受けたのかと被害者として振る舞える。

夏の暑さは何処に行つたかと思うくらいの厳冬。寒さが身に染みる。そんな寒さを逃れようとある飲み屋に避難している。薄暗い個室はビールのにおいとタバコの煙が占めていた。テーブルの上には中身が微妙に残っているジョッキと、つまみが空になつた皿と灰殻が山盛りになつた灰皿。男一人で飲みに来たらよく見る光景。

同郷のよしみで、大学入学時から仲良くしている彼と飲みに来ている。ゼミまで一緒になり、ますます話をする回数が増えている。俺と彼はよくこの店に来る。安いものもあるが、一人で他愛もない話をするのには、この手頃な狭さの個室が妙にしつくりくる。対面に座つた彼がタバコを口に含む。先端から赤く燃えていく。ひとりきり吸い込み、煙を吐き出して照明にあてる。煙を上へ上へと吐き出す彼の変な癖だ。ひとしきり吐き出した彼は火がついてるタバコで僕をさした。

「お前さあ……そろそろあの子に想いを伝えないわけ？」

そう、僕には想い人がある。同じゼミの彼女に淡い恋心を抱いている。いや、正確には入学当初から気になっていた。話しかけたり、遊びに誘つたりしてはるがそれ以上は何もしていない。

「しないよ。告白したら相手に迷惑かかるし……距離が出来たら

……」

残つたビールに手を伸ばし胃の中におさめる。苦味が口の中に広がる。

「迷惑だ？ 距離だ？ 餓鬼じやあるまいし、んなこと逐一考えんじゃねえーよ」

お酒がある一定量以上入ると彼は途端に口調が悪くなるし、話を

聞かなくなる。自分の本心を吐露しあじめる。彼の良ことじりもあるが、嫌なところ。

「むしろ、中途半端に好意示して後は何もしないで選択を彼女に丸投げにしてる時点で彼女に迷惑だろが」

タバコの火を灰皿に押し付け乱暴を消す。自身の残ったビールを喉を鳴らしながら胃に流し込む。

「いや、そういうつもりは……なくて……ただ……」

「それとも何か、」

また、彼は話を聞かない。自身の想いを吐き出すことに懸命になつていて。

「『私、貴方のことが好きなのーああ抱いて下さい』とか彼女に土下座されて言われなきや行かないのか……」

「だから…そういうんぢやないって！……」

田の前が真っ赤になる。バンッという音が個室に響いた。いつの間にか僕は立ち上がり、机を叩いていた。手のひらに痺れが残っている。

「……じゃあ、伝えろよな？」

「卒業までには伝える」

売り言葉に買い言葉。直ぐ返事をした。僕だってこのままでは良くないとは考えている。

彼は静かにうなずき、ジャケットに袖を通し始める。机の上に出ていたタバコやライターを回収する。

「言つたな……やれよ」

彼はテーブルに金を叩きつけて席を立ち上がる。ぴつたしの金額。こういう所は酔っているのにしつかりしている。飲み会の席でよくある怒号。そう思っていた。次の日からも彼は僕と普通に接した。駄弁り、つるみ、学んだ。ただ一つ彼が彼女によく話しかけるようになった以外は何も大きな変化はなかった。

結局、僕は卒業まで何も行動しなかった。諦めという鈍く優しい痛みが胸の中に広がっていくのを感じていた。それで良いとすら思えた。それが僕自信の行動の結果なのだ。

桜が舞い散る卒業式。スース姿の友人と別れて、彼に会いに行く。いつも通り喫煙所でタバコの煙を上へ上へとふかしていた。卒業証書の包みで彼の後頭部を小突いた。

「卒業おめでとう」

「ああ……お前もな」

こちらを振り向かず、タバコを吹かし続ける。灰皿へと灰を落とす。口へと持つていき肺の中にニコチンを入れる。その作業を何度かした後に彼が口を開いた。

「……結局、彼女に想いを伝えなかつたんだな」

「諦めをつけたし」

そう。なにもしなかつた。そうして時間が過ぎて、全てが手遅れになつてしまつ。そうなつたことによつて、僕の気持ちに諦めがついた。彼らしくなく、まだ残つているタバコを灰皿に捨てた。

「そつか……諦めたか……」

急に僕の肩に手を回し彼の方へと引き寄せた。タバコのにおいが鼻につく。

「そうそう。俺、彼女出来たんだ」

その発言が意外だつた。僕の相談には乗つてくれてはいたが彼からはそういうのは来なかつた。だから、そういうことには興味がないと思つていた。

「えつ、嘘？ いつの間に？」

少し自慢げに鼻を擦つた。彼の屈託のない笑顔を久々に見た気がした。

「いま、あそこに居るんだが、見えるか？」

人混みの中から女性がこちらへと向かつてくる。忘れもしない、いや出来る訳がない。恋焦がれた彼女だ。お化粧でいつもより綺麗な彼女に見とれた。真つ赤な晴れ着に身を包んだ彼女は美しかつた。

。

「シンジー！早く来なよー」

「おう、今いくから待つてろよー」

いや、まさかそんな筈はない。彼はそんな行為をするような奴ではない。彼は僕と友人で、僕の恋心を知っていた。そんな最低で卑劣な行為をする奴ではない。

「そう。アイツが彼女」

そんな期待を簡単に潰す一言だつた。今どんな顔をしているのか分からない。あまりにも惨めな顔をしているのが想像つく。見たくないし見せたくない。隠したい。だが、体が一切動かない。指先すら動かせない。

「諦めが優しい刃だと思つくなよ。てめえが思つてる以上に鋭利なんだよ」

彼が耳元で囁いた。彼がどんどん彼女の方に近付いていく。彼が近づくにつれ彼女の笑顔は輝いていく。鋭く激しい痛みが胸に生まれていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1393p/>

愚か者

2010年11月26日01時54分発行